

# 世界最速ブーツへの挑戦



## Close up レクザム Rexxam レーシング Racingの野望

アジアチャンピオンとしてアルペンレースの最高峰ワールドカップデビューを果たした片山龍馬。その片山とともにレースに臨むのが国産ブーツの「REVO R」だ。「性能至上主義」を貫くレクザムが構想から5年をかけて完成させたリアルレーシングブーツが、世界最速という野望への一歩を踏み出した軌跡を追う。

石橋謙太郎 (studioM) = 写真  
真木 健 = 文、写真 (雪上)

### 「終わった」からのリスタートでWCの扉をこじ開ける

オーストリアのゼルデンで開催した24/25アルペンスキーワールドカップ(WC)。10月27日(現地)に行なわれた男子ジャイアントスラローム(GS)には、過去最高の4名の日本人選手が出場。その中にはWCデビューとなる、片山龍馬の姿もあった。

WCへの切符を手に入れるにはいくつかの方法がある。片山の場合、WCイント差という薄氷ながらFECの総合優勝を手中にした。4年をかけて準備してきた、WCへの扉が開いた瞬間だった。

### 世界最速を手に入れたいもの同士が5年前に出会う

ゼルデンのバインでインスペクションをする片山の足元は、ブルーのレクザムブーツで固められていた。時間を5年前に戻し、二者の出会いを振り返ってみよう。

北海道・旭川市出身の片山は、現在20歳の東海大学3年生。全中やジュニアオリンピックで頭角を現し、将来を囁望されるようになった。しかし高校2年時にメーカーが撤退し、本人いわく「どん底の1年間」を過ごしていた。17歳の若者にとっては、WCへの梯子を外された思いだったろう。そんな片山に手を差し伸べる形となったのが、WCでクオリファイ経験のある岡田利修だ。ユース時代から身近で片山の滑りを見てきている岡田は、片山の窮状を知り、自らがアドバイザーを務めるレクザムブーツのテストを提案したのだった。片山も信頼する岡田の提案にチャレンジを決めた。

一方のレクザムブーツは「性能至上主義」を掲げ、世界で活躍する国産スキーブーツを目指して1992年に創立。モーグルや技術選で選手が使用し、国内外で活躍。アルペンでは2006年のトリノオリンピックで、ライナー

のひとつ下のカテゴリーに位置するフリーストックアップ(FEC)で23/24シーズンに総合優勝を果たしたことで個人枠での出場権だ。つまり、アジアチャンピオンとしてWCに臨んだのである。

12月の中国シリーズから始まり、韓国、日本の菅平を転戦したFEC。片山は当初、GSの種目別チャンピオンを狙っていたが、スラローム(SL)やスピード系種目でも成績が出たことで、総合ポイント争いのトップに立った。しかし、2月初旬の韓国シリーズでは好調だったGSのレースがキャンセル。SLでも振るわずポイント差を詰められてしまう。

「GSがキャンセルになったことで、正直、ヤバイと思いました。SLでもゴールしなくては、良い順位じゃなければポイントが取れない、と思ってしまっていたものの滑りがまったくできませんでした。これこそスランプという状態で、韓国シリーズは精神的にも追



高校3年からレクザム&ストックリーを使用する片山龍馬。雪とけんかをしない柔らかな動きと、練習以上の滑りを本番で出せる勝負強さが身上

い込まれてしまいました」

そんな状況で迎えた3月中旬の菅平シリーズ。ここでの4レース(1戦キヤンセル)でWCへの切符が決まる正念場だ。片山としてはGSで勝ってポイント稼ぎ、SLで逃げ切るという安全策を考えていた。だが追い上げられ、2レースが終わった時点で片山ともう一人の選手が同点で並ぶ。しかし、「韓国シリーズ中に「終わった」という気持ちになったのですが、菅平シリーズに臨むにあたって、ここでFECを取らなくては自分のスキー人生は何も前に進まないと思切りました。というより、いちばんの近道はこのステップだし、自分の滑りをしてダメだったら仕方ないと吹っ切れたことが、その後につながったんだと思います」と最終のSLで相手を上回り、5ポ



23/24ファイヤーイーストカップでは最終シリーズの菅平で総合優勝を果たし、ワールドカップへの切符を手に入れた。足元を支えるのはレクザムの「REVO R」だ

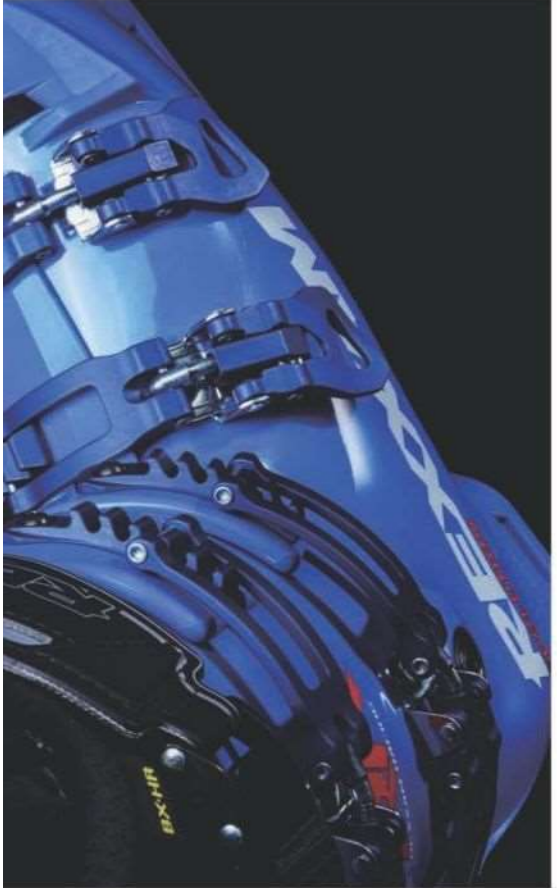


一般でも販売されているモデルだったが、そのブーツとストックリールのスキーで、インターハイSLで準優勝。レースでも通用する品質の高さが証明されるとともに、どん底であえいでいた片山にひとすじの光が見えてきた。

「まず全体の作りとしては、リアルレトは非常にシビアだったという。それをクリアした新型ブーツは、従来のレクザムブーツのフラッグシップ「REVO S」シリーズとどのような違いがあるのだろうか。」

### REVOコンセプトを 純競技用にブラッシュアップ

2年目のシーズンから新型ブーツの開発が始まった。目指したのは世界舞台でのさらなる活躍、とくにWCでの活躍だった。テストを繰り返して片山の感覚や岡田、サーピスマンの清野高悠らの意見を吸い上げてプロトタイプを製作。実戦で使用し、さらにテストを重ねることを繰り返し、構想から5年をかけて完成したものが、WCで片山が使用しているブーツである。



・シエンフェルダー(オーストリア)がアルペン複合とSLの2種目で銅メダルを獲得するなどの実績を残している。世界の頂点まであと一歩まで迫ったレクザムブーツは、その後も世界最速への想いの炎は燃やし続けていた。「もの作りに関わる者にとって世界の頂点に立つ、スキーでは最速の称号を得ることは目指すべきことであり、諦めてはいけないことです。私たちはさらに、国産ブーツを履いた日本人が頂点に立つという野望を抱えています。その想いが世界最速を目指す片山選手と一致したのです」

長年、レクザムブーツの開発を手がける渡辺剛一(開発担当課長)はこう話す。すぐにテストが行なわれ、両者のジョイントが決定した。「どこか秀でたフィリングはとくに感じませんでしたが、それが良かったのか、タイムはすごく出ました。タイムのことはもちろん、テスト環境もそうでしたけど僕にとってホームのように感じられた点も決め手になりました。選手として大事にされてる、期待されてるということがみなさんから伝わってきました」(片山)

実はこのとき片山がテストしたのは、  
ぜったいに諦めてはいけない夢を  
現実のものにするという想いが  
ぶつかり合って生まれたリアルレーサー

レーシングブーツですから、従来よりも強い作りになっています。たわませやすいストックリールのスキーとの相性も良いです。単純にたわむのではなく、ブーツを通して強い力でたわませられるので、その反発を強い推進力にできます。一方、シビアな反応を追求するため、足幅を自動的に調整するAUT OF FITは採用していません。(渡辺)

レクザムのブーツといえば、足を入れたときに踵骨が垂直、距骨が水平になることで、脛骨・腓骨が真っすぐになり、膝入れ方向と足の向きが一致するレーシング用にセッティングしました。角づけ・解放を左右する要素のひとつに、ラストのオフセットが挙げられます。従来のレクザムブーツはこのオフセットの中心軸をインサイド側に置くことで、角づけのしやすさを引き出していました。新型ブーツはそのオフセットの軸を微妙に調整することで、角づけと解放のバランスをとっています。また、かかとの幅も61mmとタイトに設定。かかと回りの骨格をつまむことで、アライメントが強制的にREVOポジションにセットされます。レーシング専用のREVOコンセプトを開発・採用した形です(渡辺)



という独自理論のREVOコンセプトを採用している。このストロングポインントも、リアルレーサー用にブラッシュアップしたという。

片山は「REVO R」と名づけられたこのブーツとともに24/25シーズンのWC6レースに出場。デビューシーズンでのWCクオリファイは逃したが、レベルの高いヨーロッパでのレースにチャレンジし、ファイヤーイーストカップも全戦出場。ヨーロッパ勢が例年になく多数エントリーした全日本選手権では、GSで日本人トップのリザルトを残してタイトルを獲得した。「WCで難しいコースやセット、レベルの高い選手と戦えたのは大きな経験になりましたし、全日本ではポイントも更新できたのが大きな成果です。トレーニングをしっかり積み、25/26シーズンはコルチナを目指します」

「レーシングで大切なのは角づけの早さ、解放の早さです。従来のブーツは角づけの早さに比べて、解放が粘る感覚でした。これは基礎スキーには向いているのですが、ニューモデルは角づけも解放も一瞬で終わらせる必要のあ

片山龍馬と、その足元を支える「REVO R」の野望は続く。